

出版業界の「架け橋」になる

藤居 本日は当「菊池寛作家育成会」の会長であり、文豪菊池寛の直系の孫でいらつしやる菊池夏樹さんにお話を伺います。よろしくお願ひします。

菊池 よろしくおねがいします。

藤居 まずは祖父にあたる菊池寛さんの思いから聞かせていただきませんか。

菊池 そうですね、祖父が活躍していた当時、日本ではまだまだ出版業界が未成熟で、文芸作家の作品を出版してくれる出版社も限られていました。ご存じのように作家は、自分の作品が出版社から発行されなければ一銭の収入にもなりませんし、発表の場も他にはありません。今のように入稿などには存在しませんから、ところがその選択肢が限られているということは、作家にとって非常に

菊池寛作家育成会 会長

菊池夏樹

×

藤居幸嗣

菊池寛作家育成会運営会社
バリツシユスタツフイニング 社長

不利な状況だったということなんです。それならば、作家である自分が出版社を作ればいい、ということから文藝春秋を創立したわけです。

藤居 なるほど。その上で新人発掘のための「芥川賞」「直木賞」を設立されたわけですが、まさに当育成会の設立趣旨も同様ですね。

菊池 はい。規模は足元にも及びませんが、市井の埋もれた才能を世に出す手助けができればと考えています。いま、文芸書の編集者は売れている作家の作品を自社から出版してもらうことに手いっぱい、無名人の持ち込み原稿に目を通す余裕はないでしょう。それならば私たちがお手伝いしようということです。

藤居 まさに私たちのバリツシユスタツフイニングが、出版業界に入りたがっている人は大勢いるのに、門戸が狭いので、出版社は人材不足に喘いでいる。その架け橋になればいい、という思いと相通じるところですね。



一方、最近は企業の
社史編纂に力を入れているとか。

菊池 はい。社史というものは今まで、たいていは応接室のインテリアとして使われ、当事者以外ほとんど読まれることなく、悪く言えば記録をどめるためだけの資料集となっていることが多いと思います。

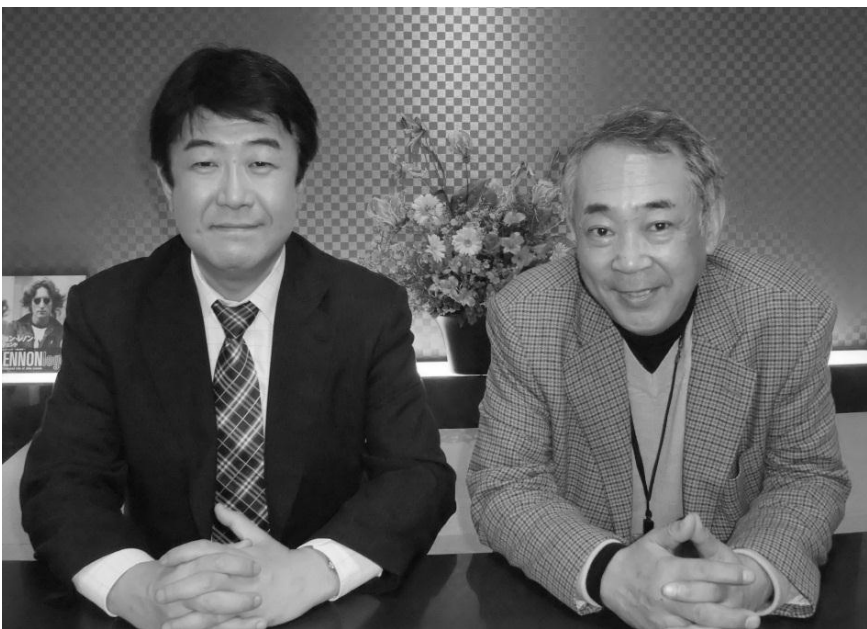


しかし、会社を設立して10年、20年と経営を続けていけば、いろんなドラマがそこにはあるはずです。奇跡的に危機を乗り越えた話や、数10年経ってもいまだに後悔している話など、企業経営ほどドラマチックなこととは無いと云っても過言ではないでしょう。

そこでプロのストーリーライターに依頼して、人に読ませる社史を編纂することは、菊池寛の思いを継承していく我々、作家育成会の仕事だと考えたわけです。



VALISH Co., Ltd.



藤居 なるほど。順風満帆で20年やってきた企業などきつとないでしょうからね。

さらに、お客さんや取引先との様々なエピソード、特に感謝したりされたりという話を書籍という形に残し、今後会社を背負って立つ若手社員に伝えていきたいという思いから社史を編纂しようという企業も増えていくと聞きます。

菊池 最近では電子書籍の話題が出ない日はありませんが、形態がどのようになると、活字が人に与えるもの、また人に伝えたい、感動を与えたいという心は変わらないのではないでしょうか。

藤居 まさにそれがおじい様の思い、いわばDNAが伝承されていくということなのでしょうね。本日は大きな力を頂いた気がします。ありがとうございました。